『ジャーロ』傑作短編アンソロジー②

子猫探偵 ニックとノラ

ジャン・グレープ 他
木村仁良/編
中井京子 他/訳

The Cat Has Nine Mysterious Tales

Ed Gorman, "The Christmas Kitten"
Jan Grape, "The Lawlessness West of the Pecos"
Janet Dawson, "Blue Eyes"
Doug Allyn, "Franken Cat"
Carolyn Wheat, "On the Take"
Nancy Springer, "American Curls"
Jon L. Breen, "Justice Knows No Paws"
Jan Grape, "Kittens Take Detection 101"
Nancy Pickard, "Dr.Couch Saves a Cat"

光文社文庫

子猫探偵ニックとノラ 『ジャーロ』傑作短編アンソロジー②

著　者　ジャン・グレープ 他
編　者　木村仁良
訳　者　中井京子他

2004年12月20日　初版1刷発行

発行者　篠原睦子
印　刷　堀内印刷
製　本　フォーネット社

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
電話　(03)5395-8162　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-76148-8　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

The Cat Has Nine Mysterious Tales

『ジャーロ』傑作短編アンソロジー②

子猫探偵ニックとノラ

ジャン・グレープ他
木村仁良 編　中井京子他訳

光　文　社

子猫探偵ニックとノラ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

『ジャーロ』短編傑作アンソロジー②　目次

クリスマスの子猫……9
エド・ゴーマン　山本光伸［訳］
ペーコス川西岸の無法地帯……59
ジャン・グレープ　山本やよい［訳］
青い瞳……93
ジャネット・ドーソン　山本やよい［訳］
フランケン・キャット……123
ダグ・アリン　山本光伸［訳］
賄　賂……175
キャロリン・ウィート　山本やよい［訳］

アメリカンカール……199
ナンシー・スプリンガー　中井京子［訳］
猫ミステリー、犬ミステリー……223
ジョン・L・ブリーン　中井京子［訳］
子猫探偵ニックとノラ……247
ジャン・グレープ　中井京子［訳］
ドクター・カウチ、猫を救う……279
ナンシー・ピカード　宇佐川晶子［訳］
解説　「猫のこの子猫この猫この子猫」　木村仁良（きむらじろう）（ミステリー研究家）……305

クリスマスの子猫

Ed Gorman. "The Christmas Kitten"

エド・ゴーマン

山本光伸 [訳]

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

1

「女王さまのご機嫌はうるわしいかい？」ぼくは訊いた。
愛らしくしとやかなパメラ・フォレストは、瞳をあげてぼくを見た。まるでぼくが、サンタクロースは本当にいるんだ、とでもいったかのような表情だ。
「あのひとに限って、そんなばかなことがあるはずないでしょ、マッケイン」パメラはにっこりした。
「そうか、でももうじき――」
「もうじきクリスマスだから、っていうんでしょ。みんな機嫌がよくなるはずだって」
「うん、まあそんなところかな」
「ところが、われらがホイットニー判事は違うのよ」
「まあ、筋を通す人だからね」ぼくは答えた。
いつものように、ぼくは呼び出しを受けてここへ来た。弁護士事務所を開業しているが、一日中電話の前に座り、数少ないクライアントから、なんとか勘定をとりたてようと躍起になっている毎日だ。愛車は一九五一年型フォード・ラグトップ。もっぱらの夢は、この車にうるわしきパメラ・フォレストを乗せ、来月デモインで開かれるプラターズのコンサートに出かける

ことだった。
「プラターズのコンサートに行くって話、考えてくれた？」ぼくは訊いた。
「マッケイン、またその話を蒸し返すの？」
「ぼくはただ――」
「もちろん、わたしはプラターズのファンよ。でも、わたしたち、もう一緒に出かけたりしないほうがいいと思うの」彼女はすまなそうな笑みをうかべていった。「もし行ったら、あなたのクリスマス休暇を台なしにするのが落ちだもの。わかるでしょコディ、あなたのことは好きよ。でもスチューが、ね」
　この年は一九五九年で、ぼくは一九五七年のクリスマス以来ずっと、パメラを口説きつづけていた。だが、前途多難だった。ぼくはパメラを愛しているが、パメラはスチュアートを愛していて、このスチュアートという男は、大学のフットボール部の元スター選手であるうえに、町で三番目に裕福な一族の跡取り息子ときているのだ。
　インターホンが鳴った。「また口説かれて困ってるんじゃない、パメラ？」
「いえ、だいじょうぶです」
「彼にこっちに来るよう伝えてちょうだい」
「はい、承知しました」
「それから、従兄のジョンに電話して、今日三時頃そっちに行くから、って伝えて」

「はい、承知しました」
「あと、クリーニングを取りにいくのを忘れないように、わたしに注意してちょうだいね」
「はい、承知しました」
「それから、マッケインにこっちに来るよう伝えてちょうだい、あら、これはもう言ったかしら」
「ええ、もう伺いました」
ぼくは愛らしくしとやかなパメラ・フォレストに別れを告げ、わが依頼人の部屋へ進み入った。

「あの男がまたやったのよ」ぼくが部屋に入って三秒後、エレノア・ホイットニー判事はいった。
この町、アイオワ州ブラックリヴァー・フォールズで「あの男」と呼ばれる人間は、一人しかいない。かの警察署長、クリフ・サイクス・ジュニアその人である。無実の人間を殺人事件の犯人にしたてあげるという悪癖で知られ、ホイットニー判事にとっては、彼の間違いを指摘するのが何物にも替えがたい楽しみになっていた。
百年と少し前のこと、ホイットニー判事の一族は東部から多額の資金を持ち込んで、この町の基礎をつくった。非常にうまくやっていたが、やがて第二次世界大戦が勃発し、これをきっ

かけにクリフ・サイクス・シニアが、潤沢な資力をふところに権力者に成り上がった。戦時中の建築ビジネスで成功したのだ。サイクス・シニアは財力に物をいわせ、町議会に自分の息のかかった人間を送り込んだが、これはホイットニー一族のやり方に倣ったものだった。彼はさらに完全に町を牛耳るべく、町の人間に賄賂をばらまいたり圧力をかけたりした。当然ながらホイットニー一族は、彼を野蛮なよそ者と嫌った。ホイットニー家の人間がヴェルディ、フェルメール、それにトルストイをこよなく愛するのに対し、サイクス家のほうの文化レベルは、ケトル家シリーズにおしゃべりらばのフランシス――ぼくがドライブイン・シアターでせっせと見てる映画とまるで変らない。

ともかく、この町で唯一、サイクス家の手中に落ちないのが、ホイットニー判事ひきいる法廷だった。クリフ・サイクス・ジュニアが誰かを殺人容疑で逮捕すると、ホイットニー判事はすかさずぼくを呼び出す。ぼくは弁護士の資格を持っているが、ほかに公開講座で犯罪学を学んでいた。それで判事はぼくをおかかえ私立探偵として雇い、何か事件が起こるたび、電話をかけてくる。ぼくとしても大歓迎だった。何しろ唯一の定収入源なのだから。

「あいつがつかまえたのは、わたしの従兄ジョンの息子、リックなのよ。恋人を殺した容疑ですって。冗談じゃないわ」

今や犯罪謎ときの世界といえば、超弩級の天才探偵か、九十キロを超えるごわごわ髪の女探偵と相場が決まっているが、エレノア・ホイットニー判事は、小柄でこざっぱりとした美人だ

った。服装のセンスもいい。この日は茶のスウェード地のブレザーに、のりのきいた白襟のボタンダウンシャツ、体に合った濃い色のスラックスといういでたちだった。シャツの襟元にはグリーンのシルクスカーフをのぞかせ、グリーンの瞳をいちだんと美しく見せていた。

ホイットニー判事は机の端に腰かけていた。机の上のケースには、輪ゴムがたっぷり入っている。

「座って、マッケイン」

「やつはやってないんですね」

「座って、っていったの。そうやってつっ立っていられるの、嫌いなのよ」

ぼくは座った。

「やってないんですね」念をおす。

「もちろんよ。あの子はやってないわ」

「いいですか、あなたが間違ってる、ってこともあり得るんです。つまり、可能性としては、サイクスが正しいこともある」

ぼくは依頼を受けるたびに、この台詞を繰り返してきた。

「でもね、今回はあいつが間違ってるのよ」

そしてこれが、いつもの彼女の答えだった。

「リックの恋人はリンダ・パーマーですね」

「そうよ」
「アパートで死んでいた？」
判事はうなずいた。
「サイクス側の証拠は？」
「近所の人が三人、リックがあのアパートから逃げるように走っていくのを目撃してる。おとといの晩にね」
判事は輪ゴムを一つつまむと、親指と人さし指でピストルの形をつくり、ぼくに目がけて発射した。輪ゴムは耳をかすめて飛び、判事はぼくがひるむのを期待している。しかしぼくはその期待を満足させてやったことはなかった。
「リックの車や衣服は調べたんですかね」
「繊維とか血痕とか、そういうこと？」
「ええ」
判事は笑顔をつくった。「あのサイクスが、そんなことするほど賢いと思う？」
「おっしゃるとおりです」
判事は立ちあがり、ゆっくり歩きはじめた。
ぼくにはこういう贅沢、つまり、立って歩きまわるという贅沢は許されていない。判事は別だ。結局のところ、彼女は世界に冠たる女王さまなのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb